

第11回府中市生涯学習審議会会議録

1 日 時 令和3年2月19日（金）午前10時～11時45分

2 場 所 府中駅北第2庁舎 3階会議室

3 出席者（敬称略）

(1) 委員13名

岩久保早苗委員、大谷久知委員、乙津俊博委員、木内直美委員、佐野洋委員、田頭隆徳委員、立石朝美委員、津田仁委員、友田照子委員、中村洋子委員、長畑誠委員、福田豊委員、渡辺たき子委員

※藤井孝弘委員、渡邊和子委員欠席

(2) 職員4名

二村文化生涯学習課長、柏木生涯学習係長、諫山事務職員、山本事務職員

4 報告事項

(1) 配布資料の確認

ア 資料1 第10回府中市生涯学習審議会会議録（案）

イ 資料2 答申（案）

ウ 資料3 答申タイトル（案）

エ 資料4 答申（案）（ですます調）

(2) 前回議事録の確認

各委員に校正を依頼した前回議事録（案）について、市民に公開することが了承された。

4 審議事項

(1) 第3次府中市生涯学習推進計画の具体化に向けて

長畑会長： まず初めに、資料2について事務局から訂正箇所があるとの事なので、願います。

事務局： 資料2について修正点が2点ある。1点目が、3ページの項目2「合意形成技能」となっているところを「合意形成技能等」とし、「等」の追加を願います。2点目は、4ページの上部【重点施策】について、「次行」となっているところを、「事業」への修正を願います。

会長： 今回の流れについて説明をさせていただく。まず都市社連協に報告する必要があるため、答申のタイトルを先に決定する。その次に答申（案）の中身について意見を伺う。そ

して最後に体裁について、「である調」、「ですます調」についてどちらがよいかを皆さんに伺いたい。まず答申タイトルについてである。資料3をご覧ください。今までの話し合いに出ていた。「学び返し」の新たな展開と「地域の課題解決」という言葉を入れて、「学び返しの新たな展開を目指して～地域の課題解決に向けた生涯学習とは～」というものになっている。このタイトル案について何か意見があればご発言いただきたい。

委員： 前後の文章が噛み合っていない印象を受けた。「学び」と「地域の課題解決」が結びつくメカニズムが説明しきれていないのではないかと。「地域の課題解決と生涯学習」というようにした方がいいのではないかと。民生委員のような活動をするわけではないし、社会的な活動の中にも「学習」があるということを経験に合わせるだけである。

会長： 確かに「向けた」としてしまうとその部分が強調されすぎてしまうため、「地域の課題解決と生涯学習」とすることで両方考えているという意味合いを持たせた方がいいかもしれない。

委員： 私は、資料3のままでいいと考える。その方が明確に新しい生涯学習の方向性などが伝わると思う。

委員： 地域の諸問題以外にも、子育てや介護といった地域に限らず市民が抱えている問題も解決する必要があるため、「地域」の後に「等」を入れると地域の課題とその他の様々な問題を取り上げるといったものになると思う。

会長： おそらく、タイトルは中身の話とも関係してくるものであるため、タイトルの決定は一度保留にして、中身の話し合いをした後で決める形にしたいと思う。それでは、中身についてであるが、今回初めて基本施策1から3をすべて合わせたものを提示している。合わせるにあたり、流れなどを考慮し、変更したところがあるため、お伝えする。基本施策2にあった「時代の変化に対応した生涯学習の手法」はどちらかという学習環境に当たるため、基本施策1へ移動している。基本施策3については、カタカナ言葉を分かりやすくするため言葉の変更をしている。また、「はじめに」と「おわりに」も今回から加えている。「おわりに」には、審議会中に論点として挙げられたが、あまり深められず、今後も議論が必要と思われる点について入れている。基本施策1から中身について、意見を聞いていきたい。

委員： 「共助・自助」という順番についてであるが、「自助・共

助・公助」という順番が一般的に浸透している中で「共助」強調するために語順を変える必要はないのではないか。強調したいのであれば「共助」だけを取り上げればいいのではないか。「共助」の話をしているが、「自助」の話はしていないため、それをわざわざひっくり返して「共助・自助」というようにする必要は無い。そして、生涯学習ファシリテーターもそうだが、府中市独自の考え方によって言葉のわかりづらさを助長してはいけないと考えている。

委員： 通常、「」というのは引用で使われるものである。そうすると、「共助・自助」という表記は無いので、使われないものである。そう意味では、「自助」を取ってしまうか順番を戻すかとどっちかであると考える。

会長： 文脈的には、「共助」に重点を置きたいものであるため、お話にあったように、「自助」をはずすことを考える必要がある。

委員： 「自助」を取るのであれば、言葉を少し入れ換えて「さらなる『共助』の推進」とした方がいいのではないだろうか。

委員： 「はじめに」の部分でコミュニティの希薄化という言葉がでてきているが、コミュニティというのは共同体であるため、希薄化というのは違和感がある。弱体化などの方がふさわしいのではないか。

委員： PDCAサイクルというのは、やっている業務が正しいかを検証するというものである。生涯学習の講座などを企画する際には、行って当然の事だと思うが、それをわざわざポイントの1番目に持ってくるということは今までやってこなかった府中市生涯学習センターに苦言を呈するという捉え方もできてしまい、それがこの答申の1番最初に来ることに違和感を覚える。

副会長： この文章を入れた意図としては、指定管理者のサイクルが4～5年と長く、長期的な見方をすればPDCAサイクルを行っていると言えるが、それをより短い間隔で行っていくという意味で書いたものである。確かにPDCAサイクルという言葉を用いずに表現をしてもいいと思うが、何か案などはあるか。

委員： 具体的な案は今のところないが、この文章を読むと、「その成果を公開する」と書いてある。この「公開」に重点を置くのであれば、「公開」をした結果何ができるのか、PDCAサイクルで府中市生涯学習センターの業務管理をす

るのだとしたら、市と指定管理者の間で行えばいい事である。市民から指定管理に対して、意見を言える仕組みがあれば「公開」という点にも意味を感じるが、PDCAという言葉が先行している印象がある。

副会長： 毎年チェックしたことを公開したほうがいいのかということを書かせていただいている。先ほども申し上げたが、4～5年のサイクルの中で何らかの形で講座の見直しをしていき、評価をする手立てを答申に加えたいが、別の表現にすることも考えられる。

委員： PDCAに関しては第3次府中市生涯学習推進計画の中で、計画の進行管理として最後に書かれている。今おっしゃったような形であるとすれば、評価を公開した結果何ができるかが重要ではないだろうか。

会長： 公開ということを強調するのであればポイントの部分だけでなく本文にも入れる必要がある。

委員： そもそも、評価を現段階でもやっているかというのを聞きたい。もう一つは、PDCAは当然やらなくてはいけないことであるため、評価を行い、それを公開するのではなくて、その成果を生かしていくというように書けばいいのでは無いだろうか。市民としても、PDCAの中身を聞くことはできるため、文書でも残しておき、さらにその成果を生かすことが重要であるため、公開するというところにそこまでこだわらなくてもいいのではないか。

事務局： 1年に1回、実績報告という形で指定管理者が取っているアンケートや講座の参加率をまとめたものを作成している。

会長： 府中市生涯学習センターにおいて行われている講座のあり方について見直しを継続的に行い、生かしていくということであったと思う。

委員： 昨年度、府中市生涯学習センターにヒアリングを行った際に、見直しなども行っており、文書にして残しているという回答があったが、その文書が深いところにあり、なかなか見えてこないため、もっと分かりやすく公開したほうがいいのかということがあり、この答申にも反映されていると思う。そのため、この成果を公開するということは重要であると考えます。

会長： 講座の見直しをしていくことと、それをしっかりと市民の目に触れるようにしていき、次の改善に役立てるといった方向にしていきたいと思う。基本施策1について他に意

見はあるか。

委員： コミュニティスキルの注釈についてであるが、読むと「汎用の問題解決能力をいう。」と書かれているが、これは少し違っている。汎用問題解決力というのは私の表現では「ソーシャルキャピタル」であり、今までの計画の中では「地域力」という言葉であった。その「ソーシャルキャピタル」や「地域力」の醸成を進めるのに必要なものが「コミュニティスキル」であるため、「コミュニティスキル」を汎用問題解決能力と定義するのは少し違うと思う。例えば、私であれば、「地域力を醸成するのに必要とされる合意形成技能やコミュニケーション能力、ICTリテラシーをいう」というように表記する。

会長： ICTリテラシーという言葉も少し言い換えが必要になる気がするが、そこはまた考えていきたい。

委員： 3ページ目の「コミュニティスキル」が出てくる部分について、取り組みとして、生涯学習ファシリテーター養成講座に組み込むと書いてあるが、生涯学習ファシリテーター養成講座の内容に組み込むだけでは足りないと思う。つまり、「コミュニティスキル」というのはコミュニティを形成する住民の方々に身に付けてもらいたいものである。そのため、生涯学習ファシリテーター養成講座の講座内容に接続するのは賛成だが、それと同時に市民向けにも、別途講座を開設するなどしたらどうか。

委員： 基本施策1の1の部分で「学習活動の状況を分析する」と、「例えば、関心の高い講座について、これまで参加できなかった人達が参加しやすい枠組（時間帯や開催場所）を採用したり、参加してこなかった人達の潜在学習ニーズを把握したりする」の部分が上手くかみ合っていないような気がしている。分析するということは現状を把握することであるため、どのような内容でどんな人が参加しているかや、人気の有無や、ニーズに答えられているかなどといったことを分析することである。「例えば」以下の部分は分析をした後の事であるため、表現を再度検討する必要があるのではないか。それから、「これまで参加できなかった人達が参加しやすい枠組（時間帯や開催場所）を採用したり、参加してこなかった人達の潜在学習ニーズを把握したりする」という部分についてだが、参加していない人のニーズは把握できないのではないか。また、基本施策1の2の「コミュニティスキルを育む」という点につい

て、ここの部分は生涯学習ファシリテーターの人が「コミュニティスキル」を身に付け、文化センターを「場」として使うと書いてあるが、これは個人の主体性任せで、「コミュニティスキル」を獲得しても、場所も与えられず、次のステップも書いてないので、親切ではないように思う。そうではなくて、「コミュニティスキル」は具体的な活動の中で身につくものである。例えば、課題を地域で話し合い、問題解決する中から互いに「コミュニティスキル」が生まれてくる。そのため、講座を設け、その中に生涯学習ファシリテーターが入って一緒に活動していくことで育まれていくものであるため、この答申案のように生涯学習ファシリテーターが動くことは難しい。

会長： 1点目については、その通りで、分析した後のことについての記述になってしまっている。書き直しを行いたい。そして2点目の指摘は、先ほどの発言とも合わせると、市民向けの「コミュニティスキル」の講座も設けると、生涯学習ファシリテーターじゃない人達も身に付けてもらえるということがあり、その後で、文化センターを「場」として活用するというのは、今期の審議会でも議論を深められてないため、「期待できる」という表現しかできないというのが現状である。そのため、「おわりに」のところで今後検討していくべき課題として触れる形にしたいと思う。

委員： 生涯学習ファシリテーターの機能がはっきりと見えていない段階で、多くの役割を追加するというのは重過ぎる気がしている一方で、これまでの審議の流れや審議会の活動の接続を考えるためにも生涯学習ファシリテーターという文言は本文にも入れていいと思う。また、「コミュニティスキル」については身に付けるのが難しいということがある。そのため、言わば「伝道師」のような存在も必要であり、その機能を果たすことを生涯学習ファシリテーターの人たちにも期待したいといった方向性に見てみたらどうか。

会長： そのような方向性も検討していきたい。それでは、基本施策2について議論をしていきたい。内容としては「学び返し」をどのように進めていくかというところであるが、ここに「価値化」という言葉を入れている。しかし、あまり良くわからない部分が大きいため、この部分についても意見を伺いたい。まず副会長にこの「価値化」という言葉について説明をしていただきたい。

副会長： 「学び返し」をする目的として、地域の問題解決というのが議論されてきた。そこで、「学び返し」と結びつけるために何らかの役に立つということが明示化された方がいいのではないかと思い「価値化」という言葉を用いた。分かりやすい例えとしては、資格制度がある。最も「価値化」として最上位にあるのはお金に換算できるということだが、今回はそこまで言及していない。生涯学習ファシリテーターの活躍の場として、最適な資格を持っている人がその課題に当たるというマッチングをより進めていくということのためにこのような概念を組み入れてもいいのではないかということで加えさせていただいた。

委員： 一読してみると、確かに分かりづらいつ感じるところもあるため、注釈を加えたりして説明してはどうだろうか。この表現はとても魅力的なものであるため、残してほしいと思う。

会長： 注釈を加えるという方向で調整したいと思う。他に基本施策2について今のところ以外で意見のある方は発言していただきたい。

委員： 学習と地域課題の解決活動を結び付けている訳であるが、これがどのように結び付いていくか、地域の課題解決を取った時に市でも取り組んでいたりするわけである。それが「学び」と結びつく仕組みを現状として説明したほうが分かりやすいのではないか。4ページの下から4行目に「地域に住む多様な市民が、それぞれの経験や能力を活かして地域や社会のニーズに応え、課題解決に向けて協働していく」とありこれは課題解決で終わってしまっている。しかし、これを繰り返し行った課題解決のプロセスの中に「学び」があるという部分が抜けてしまっているのではないか。

会長： 今おっしゃられたとおりで、皆さんそれぞれに知識と経験があるが、お互いにそれを学び合うということからも新しい目標が生まれてくるし、そうではなくても、学んでいく中でもっと知りたいと思い、学んで、そしてそのことが課題解決にもつながるということがあるため、「学び」ということもプロセスの中に加えていきたいと思う。

委員： 基本施策2の2に書いてある実行委員会の部分について、以前発言したものと異なるように感じた。この実行委員会というのは、府中市生涯学習センター、市民活動センタープラッツ、文化センター、生涯学習ファシリテーターを中心にして実行委員会を作り、そこで企画立案をする。そし

ていざ実施するとなった時に、関係する様々な団体を呼んで一緒にそこで実施するというニュアンスでお話をさせていただいたが、答申案の中の実行委員会では、各施設がフォローする立場になっている。その実行委員会をいきなり団体等に任せるのは難しいため、まずやってみるという点に関しては、答申案に書いてあるような形では厳しいのではないか。また、「学び返し」について周知されていないというのが何度か議論されているため、広報活動による市民への周知という事は入れておく必要があるのではないか。「学び返し講座」を実施するにしても、それを説明できるようなものがないとなかなか実現するのは難しいのではないか。パンフレットなどを作成してしっかりと広報活動をしていく必要がある。

会長： 府中市生涯学習センターが中心になるという事を考えていたが、実現可能性を考えると、市民活動センタープラッツや文化センターまで書き加えることができるかという問題がある。

事務局： 市民活動センタープラッツ、文化センターは、それぞれの組織としての活動があるため、講座の実施主体として入ってもらうことは難しいものがある。ただ、アドバイスや助言をしてもらうという形で参加してもらうことは可能性としてはありえる。

会長： 府中市生涯学習センター内に組織するとなった時には職員の人たちが主体となることは可能という前提の上で、講座を展開している市民活動センタープラッツや文化センターの職員からも参加してもらい、意見交換などをするといった書き方を検討する。また、広報にも力を入れるべきという点は、おっしゃる通りであるため、そこも書き加えたい。

委員： 先ほどの発言にあった「学び」と「地域の課題解決」のつながりがよく見えないという指摘については、3ページの基本施策1の2の、「府中市民全体の『コミュニティスキル』をはぐくみ育てる学習活動を行うことを提案する。」というところで触れられている。つまり「コミュニティスキル」は問題解決のために必要であるという事であるが、ここは少し補足が必要である。課題解決のための汎用能力は地域力であり、その地域力を醸成するのに「コミュニティスキル」が必要で、「コミュニティスキル」は学ばなければ身につかないというところで「学び」が必要になるという

つながりである。そのため、3ページでは触れられてはいるが、説明が弱いため、「汎用の問題解決力としての地域力こそが重要である」というような文言もどこかに入れておき、4ページ目の文章につなげていくといいのではないか。また、4ページ目の下から2行目の「課題解決に向けて協働していくという方向性をつけ加え」とあるがこれは付け加えるのではなく、原点に立ち返るという事ではないか。もともと、課題解決のために学習をするという事が宣言されているため、ここで付け加えるとしてしまうと、今までやってなかったのかという事になってしまうのではないか。

委員： 果たして、「生涯学習」は地域の課題解決が原点に立ち返ることなのかという事である。「地域の課題解決」や「コミュニティスキル」を推進していくことは構わない。ただ、「生涯学習」として、それに参加した個人にフィードバックしたものが何かというと「地域力」の向上ではなく、「生涯学習」として個人にフィードバックできるものが無ければいけない。その意味で、「生涯学習」と「地域の課題解決」が結びついていないのではないか。私が考える文案としては、「第一次的に持てる経験や能力を出して協働するにとどまらず、経験や知識を出し合った土俵で、市民同士が解決策を検討する過程の中で得られる新たな知識・経験、昇華される知識に対する喜びと、解決を見る時の充実感が、共助の中でこそ育まれ、その過程こそが生涯学習の新たな局面と意識できるようなニュアンスを補足し、付け加えた方向性に対する『厚み』や『深さ』『意味性』にもっと言及する必要があると思われる。」である。そのため、課題解決をして「地域力」を向上させるのではなく、それに対して、共に活動する中で、自分にフィードバックできる、つまり、課題解決をしていく過程で自分の中に新しい知見が加わっていく。そして、地域課題を解決したという事によって自分の知識と経験が昇華されるという過程の中に「学び」があるといった点が足りておらず課題解決で終わってしまっているのではないか。個人にフィードバックできる生涯学習の側面をより課題解決と結び付けるプロセスを説明しないとイケないのではないか。

会長： どちらの意見もその通りのものである。地域の困りごとなどを解決するには、「コミュニティスキル」を中心にしたものを身に付けていかなければいけないが、生涯学習とは、

学ぶことによって自身が豊かになるという側面もあるため、そういった点を個人に還元できるように作成していく必要がある。

委員： 今まで課題解決に学びがついて来なかった。そして「共助」こそ、今のコミュニティに必要なのだからそれに向けて焦点を当てようというのはとても大切なことである。また、「学ぶ」という事は自身に返ってくることであるため、自己研鑽であるとか、知識や知見を高めるという意味でも当然のこととして原点である。それだけではなくてというのが府中市の生涯学習事業の理念である。そのため、「学び」と「課題解決」のつながりは一番強い軸として据えておくべきであると思う。

委員： 生涯学習ファシリテーターの役割がまだはっきりしていないような気がしている。先ほどの実行委員会を組織するという話があった。その実行委員会の中に生涯学習ファシリテーターを入れる時には、ただのボランティアではなく、講座を企画するための臨時職員として招くことで生涯学習ファシリテーターの役割や立場というものがはっきりしてくるのではないか。

事務局： 現在、生涯学習ボランティア「悠学の会」が講座の受付や生涯学習ボランティア入門講座に入らせていただいております、そういった方たちは完全にボランティアで活動していただいているため、臨時職員を新たに採用するというのは実現可能性としては低い。

委員： この答申案の中では、具体的に何をしていくかというのが書かれていない。まずは、府中市生涯学習センター側として何かをやらなければ何も見えてこないのではないか。例えば、各施設と協働して実施するという言葉で表現するのは容易である。縦割りの組織がある中で、「生涯学習」をキーワードに横のつながりを作るとするのは賛成であるが、実際の運用や課題が見えてきて活動するときによいような形でブレイクダウンされるのかが書かれていない。具体的にこれを取り上げてやるとしたらどうなるのかという想定を抽出していないといつまでたっても机上の空論で終わってしまうのではないか。第3次府中市生涯学習推進計画も策定から2年が経過しているが、答申等による大きな進歩がないため、より具体的な方向での答申が必要ではないか。

会長： 第3次府中市生涯学習推進計画については、今期の審議

会ではじめて具体的にこのようなことをやっていったらどうかという事を提案するものである。そのため、「コミュニケーションスキル」を育むことや、実行委員会を組織するといったこと、その詳しい運用等については「おわりに」のところで、このような提案をするが、実際に動いていくにあたっては様々な課題があるため、次期の審議会ですっかりとフォローしてほしいといったように書いて、提案して終わりというだけでは終わらせないようにしたいと考えている。

委員： 実行委員会の役割がとても大きなものになっており、これを実現しようとするとなかなか難しいように感じる。この実行委員会のメンバーの中に、例えば、地元の大学に協力を依頼し、専門家のような方に参加していただいてアドバイスなどをもらいながら活動していくことも必要ではないか。

会長： 確かにその点は重要であるため、書き加えたいと思う。続いて、基本施策3について何かお気づきの点等あれば、ご発言していただきたい。

委員： 基本施策3の答申のポイントの2つ目について、「生涯学習センターで実施されている講座の紹介動画を関係各所と密接に連携し製作し」とあるが、前回までは、「密接」というのは入っていなかった。追加した意図を教えてください。私の考えとしては、入っていなくてもいいように感じる。また、7ページに『学び返し』の広報事業を進める」とあるがこれは、「生涯学習」の広報事業を進めるとした方がいいのではないか。

委員： 「学び返し」という言葉自体を広報していく必要があるのではないか。「学び返し」という言葉に興味を持ってもらうことが第一である。府中市の「学び返し」を定着させることが大切である。

会長： 中身としては、生涯学習全体に関係するが、「学び返し」そのものもしっかりと広報していくという事で、ご指摘の点はもっともであるため、変更させていただく。

委員： 「市民各層が持つ市民の役割・立場」というのはどういった意味があるのか。また、「情報提供を広報に止めないような取り組みをし」と「ちなみに国内でのインターネットサービス開始は、平成4(1992)年のことである。デジタル技術やマルチメディアの利用は、不可欠になりつつある。」という点は無くてもいいのではないかと思う。

- 会長： 本日頂いた意見の中で実際の運営の際の課題や、生涯学習ファシリテーターの役割など、今後、議論が必要な重要なものがいくつか出てきたため、「おわりに」に書き加えさせていただきます。答申案全体について何か意見などがある方はご発言いただきたい。
- 委員： 基本施策1の3で「時代の変化に対応した生涯学習の手法」とあるが、読んでみると、下の文章とタイトルがあっていないように感じる。また、「オンライン講座の活用や併用を進めることは」とあるが、この「講座」というのはとってもいいのではないだろうか。講座にこだわる必要はないように感じる。それから「生涯学習センターに集うボランティア」とあるが、第3次府中市生涯学習推進計画には「生涯学習ボランティア」と明記されているため、そちらに合わせたほうがいいのではないか。
- 会長： ご指摘の点については修正をさせていただく、また、「情報格差問題（デジタルディバイド）を考慮することも必要である。」という一文では弱いのではないかという意見も事前にいただいているため、そこについても修正をしたいと思います。最後にタイトルについて議題を戻したいと思う。これまでの議論を受けて、意見をうかがいたい。
- 委員： 「地域の課題解決に向けた生涯学習のあり方」とするのと、タイトルだけを見たときに、地域の課題解決をするための生涯学習という狭い意味だけで捉えられてしまう可能性もあるのではないか。生涯学習は課題解決のためだけのものではなく、解決を通して自身の力にもなるということもあるので、地域課題の解決以外にも様々なものがあるということが少し含まれていてもいいのではないか。
- 委員： タイトル（案）の後半についているサブタイトルはいらないのではないか。今日決めるというのは何に使うためなのか。
- 事務局： 都市社連協の年間の活動記録の冊子を作成するにあたり、各市が出した答申のタイトルを掲載する必要がある。
- 会長： メインタイトルについては異論がないため、今回はメインタイトルだけを載せるというのもいいかもしれない。
- 委員： 他市の方にも配布されるという事であれば、サブタイトルはあった方がいいのではないか。
- 委員： 今期の生涯学習審議会は、人生を豊かにする生涯学習を継続しつつ、「学び返し」を通して、地域の課題解決もしていくという事を焦点にしているため、このタイトルでもい

いのではないか。

委員： 「学び返し」という言葉自体が府中市独自の考え方であるので、都市社連協の他市の方にも興味を持ってもらえるのではないかと思う。そのため、答申の方のサブタイトルについては保留にして、都市社連協の冊子ではメインタイトルだけにしてもいいのではないか。

会長： 最終的にタイトルはこの答申の顔になるため、慎重に決めていきたい。そのため、申し訳ないが、今回は、メインタイトルだけにして、サブタイトルについては保留という形をとらせていただきたい。

7 その他

(1) 次回開催について

出席委員の都合を挙手にて確認し、事前に確認した欠席委員の都合と調整し、2月19日（金）午前10時～12時で開催することが決定した。